

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

生まれつき両足と左手に障がいのある十二才の少年テオは、家族からはなれて障がい者支援施設で暮らしている。しかし、多くの人々に助けられて、礼儀正しく過ごし、「ありがとう」を言っただけでいい日々を過ごしていた。そこで、「ありがとう」を言う代わりに、自分のことはなるべく自分でする努力をはじめ、ひとりで着替えをしたり、卓球をしたりするようになった。この場面は、努力をはじめて二カ月後のできごとである。

その日は、トレーニングが終わってもまだ元気だった。そこで、ぼくは部屋に帰って昼寝をするかわりに浜辺に行ってみることにした。施設の公園の奥に浜辺が広がっている。アスファルトの道を通って、ぼくはひとりで海に向かった。車いすをガタガタいわせながら、小石のころがる道を進んでいく。ヨットスクールの練習でもながめながら、海を見よう。そう思った。それに、海まで行けば、顔見知りの障がい者や職員に三分ごとにあいさつしなくてもすむ。

やがて、浜辺の前にある手すりのところまで来た。そのとき、ぼくはふと思った。もしぼくが健常者に見えたら、知らない人たちはぼくをどんな目で見るのだろう。

そこで、ぼくは植えこみの中に車いすをかくことにした。体をすべらせて車いすから地面におりる。そして、うでの力を使って砂浜まではっていった。いくつもあざを作りながら……。トレーニングのおかげで、なんとか浜辺にたどりついた。息切れはするし、うではもうパンパンだ。だけど、いい気分だった。海を前にして、ぼくは砂浜に座った。日が当たって気持ちがいい。

ヨットスクールのインストラクターが生徒に向かって何かさけんでいるのが聞こえてくる。どうやらひとつのヨットに乗った少年ふたりに、ブイで区切られた三角形の練習範囲にヨットをもどす方法を教えているらしい。説明が悪いのか、それとも生徒が下手なのか。さかんに身ぶり手ぶりで教えるインストラクターを見ると、ぼくはつい笑ってしまった。

ぼくのわきを数人が通りすぎた。ジョギング中の人もいれば、犬を連れた夫婦もいる。犬は、近づいてきてくんくん鼻を鳴らした。その犬をなでながら、ぼくは飼い主の夫婦と少し話をした。そんなとき、いつもなら車いすのせいで気まずい空気が流れ

る。でも、生まれて初めてそうならなかった。話をした夫婦は、笑顔も声もやさしすぎなかった。ふだんだったら、早く切りあ

げたいという気持ちが目奥に見えるところだけれど、それもなかった。

気がつくとき、あたりは暗くなりかけていた。もう七時だ。これじゃ夕食に遅刻する。ぼくはふたたび地面をはって、車いすまで引き返した。そこまでは何もかもがうまくいっていた。

調子が狂いはじめたのは、そのあとだ。何度か車いすに上がろうとして、ぼくは気づいた。この体勢では、ひとりで車いすに上がるできない。頭の中がパニックになった。不安でのがしめつけられる。『落ちつくんだ、テオ。だいじょうぶだ！』何度言い聞かせてもむだだった。どうしようもなかった。涙が頬を伝う。こわかった。それより腹が立った。どうして、ひとりでできないんだ？ この二カ月、ぼくはたくさんさんの問題を解決してひとりでいろいろできるようになったのに。それなのに、どうして車いすひとつ登れないんだ？

ついに涙も出てこなくなった。力がつきかけていた。施設までは帰るなんてとてもじゃないけど無理だ。ぼくは車いすの横に寝そべて、海の音を聞いた。そうしていると、だんだん落ち着いてきて気分がよくなった。大声で助けを呼ぶのはやめておいた。だれにも見つけられなくなかったから。このままここにいて、すべてを忘れたかった。

ぼくを見つけたのは、指導員のカトリーヌだった。仕事のあと、海ぞいを散歩しにきて、植えこみからぼくの車いすのハンドルが出ていることに気づいたのだ。ふつうなら、あの時間はみんな施設にもどっているはずだから、不思議に思っただけにきたらしい。ぼくは意識がなかったそうだ。力ついて車いすのそばに横たわったあとは何も覚えていなかった。目が覚めたら、全身ぐったりしてベッドの中にいた。山ほど毛布がかけられて……。そばにはエヴリーヌがいて、部屋の中を行ったり来たりしながら、ぶつぶつ言っていた。

「まったく、子どもをひとりでだけで散歩させるなんてありえないよ。だれも見えないなんて……。昔はこんなじゃなかった。今の子は好き勝手したがって困ったものだ。まわりも甘やかすし。これじゃ、何が起きてもしかたないね。大変なことが起きたかもしれないっていうのに。ああ、もう……」

そんなエヴリーヌを見て、ぼくは笑いたくなくなった。それから少しづつ、何があったのかを思い出した。そのとたんに、落ちこんだ。涙があふれてくる。ぼくは、泣いているのをエヴリーヌに気づかれないうちに毛布の下にもぐりこんだ。こんなことなら見つからないままでいればよかった……。

ひとりで何かするなんて、ぼくにはやっぱり無理なんだ。これからも、ぼくは「お願いします」や「ありがとう」を言いつづけなきゃいけないんだ。この二カ月、何でもひとりでやろうと努力してきたことは、結局、何の役にも立っていなかった。ぼくは、この先もいろんな人の善意にすがって生きていかなきゃいけないんだ。そして、ここにいる大人みたいになるんだろう。やる気のない大人、海の前や廊下のはしでぼんやりしてるような大人に……。

あの大人たちは、ぼくがひとりで着がえをしたり、車いすに移ったりしてがんばっていたときにもただのんびり楽しく過ごしていたにちがいない。^② たしかに、ぼくは小さな勝利は収めた。でも、大きな戦いには負けたんだ。そもそも生まれたときから、ぼくは負けていた。はずれくじを引いたんだから。そうとしか言いようがない。

そんなことを考えていると、母さんがやってきた。なんだか疲れて見える。これも全部、ぼくのせいなんだろう。でも、「だいじょうぶだよ」と言っただけで母さんを安心させる気分にはなれなかった。だってぼくがこうなったのも、もとはと言えば母さんのせいなんだから。いつそのこと、ぼくが生まれたときに首をしめてくれればよかったと思う。医者治療なんかさせないで、「ぼくの命を助けて」なんて、ぼくはひとつもたのんでいない。

施設にいて、いろいろな人がぼくの面倒をみてくれる。足や背骨や体のあちこちのケアはもちろん、心のケアやしつけまでする。そして、みんなして「努力しろ、よい子でいろ」って無言の圧力をかけてくる。まるで、すごく悪いことをしたせいですつと許しをこわなきゃいけないみたいに……。でも、悪いことなんて、ぼくは何ひとつしてない。

しばらくするとたいした話もしないまま母さんは帰っていった。

そのあとは、カウンセラーが来た。カウンセラーだけあって、ぼくを理解しているようなことをあれこれ言う。

「がっかりしてる、そうよね？ でも、今までがんばってひとりでできるようになったことは、いっぱいあるでしょ。それは認めないと。あとは、ちょっと助けがいることも、受け入れないといけないわね。あなたは何でもひとりでやりたい。でも、何もかもをひとりでできない。だから、欲求不満なのよね」

そのとおり。だけど、だから何だって言うんだ？ ぼくの気持ちを教えてくれるのはいいけど、そんなこと自分でもわかってる。ぼくがほしいのは、どうすればできるようになるか、その答えだけだ。

「障がいを受け入れなさい。障がいといっしょに生きるようにするの」

カウンセラーはそう言った。でも、だれが受け入れたりするものか。障がいなんて、たのんでこうなったわけじゃないんだ。

じやまなものでしかない。そんなものをどうして受け入れなくちゃいけないんだ？　ひとごとだと思ってよく言うよ。

③ 元氣になったらまた面談すると約束して、カウンセラーはようやく出ていった。

次は、友だちがやってきた。少なくとも、友だちはあれこれ説教したりしない。話してくれたのは、ぼくがいなくなったあとの大ききだった。どうやら、ぼくをさがすために、おおぜいの職員が走りまわっていたらしい。洗濯カゴの中身を全部出して、ぼくが落ちていないか確かめた療法士もいたそう。食堂では、ぼくがいなくなったことにすぐに気づかなかったことで指導員たちが怒られていたという。さらに、カリムとみんなは、療法士のシヤンタルが運動療法室の倉庫をしらみつぶしにさがしているところに出くわして、シヤンタルを中に閉じこめてしまったそう。④ 「シヤンタルつたら、ドアに鍵をさしつばなしだったんだぜ」

ぼくが車いすの横でぐったりして体が冷えきっていたときに、みんなでそんなにふざけていたのか……。話を聞きながら、ぼくはしかたなくいつしよに笑った。結局はそんなふうにあざけているのが正解なのかもしれない。どうせ、施設にいなきやならないのなら、できるだけ楽しくしてるほうがいいだろう。

それから数日間、ベッドで静養したあと、ぼくは起きあがった。まだとても疲れていたもので、一日の時間割は減らしてもらえた。授業だけ受けばいいことになったのだ。残念なことにはずとではないけれど……。

そして、起きあがってから一週間後、ぼくはふたたびカウンセラーと面談をした。カウンセラーは重要な話を持ちだした。その話を聞いて、ぼくは動揺した。運動療法や直立練習などのリハビリにもどるか、もう一度スポーツに挑戦するか、どちらかを選ばないといけないという。もしどちらもうらないなら、家に帰ることができそうだった。それもいいかもしれない。でもぼくが家にもどったら、母さんが困るにちがいがなかった。一日中ぼくがいたら、母さんは大変だ。それに、ぼくを受け入れてくれる学校なんて、どうすれば見つかるんだろう？　だめだ、家に帰るなんてできない。夢を見ちゃいけない。

カウンセラーに「一日考えさせてくれませんか」と言ったら認めてもらえた。よかった。でも、本当は時間かせぎをしたいだけだった。考えるのなんていやだったから。部屋にもどると、ぼくはベッドに寝そべり、ヘッドホンをして音楽を聞いた。

ヘッドホンのせいで、父さんが部屋に入ってきたことに気がつかなかった。

頬をなでられたので、目を開けると、横に父さんが座っていたのだ。ぼくはヘッドホンをはずした。

「久しぶりだな、テオ。すぐに来られなくて悪かった。たぶん、あまり話をしたくないんじゃないかと思ってな。そう、下でカリムたちに会ったぞ。おまえがいなくなったときのことを話してくれた。それと、いたずらの話も聞いた。あれは笑えるな」

ぼくは少し笑ったけど、だまっていた。

「いや、言いわけするわけじゃないんだが、父さん、最近本当に忙しいんだ。おまえに会いたくてもなかなか来られない。ヴィクトールのこともまかせきりだから、母さんには文句ばかり言われるよ。このごろ、ヴィクトールも手がかるようになってきた。大きくなったんだ。そういうえば、ヴィクトールは友だちに、おまえが卓球の試合で大活躍した話ばかりしてるようだよ。母さんがとった写真も見せてほしい。あいつは、お兄ちゃんが自慢なんだ。父さんだって、心からおまえを誇らしく思ってる。試合の日は来られなかったが、一日中ずっとおまえの試合のことを考えていたんだ。次の試合は、休みをとって見にくるからな。約束する。ぜったいに来るからな」

「父さん、ぼく、卓球を続けるかどうかわからないんだ……」

「たしかに、あんなことがあれば落ちこむだろう。でも、いつもここに来るわけじゃなくても、おまえのがんばりは、父さん、全部知ってるぞ。母さんが、ここでエヴリーヌやフランソワーズから聞いた話を父さんにもしてくるんだ。おまえはもともと自立したいと思ってるんだよな。わかるさ。もう大きくなったんだから。そろそろ母さんも、おまえを赤ちゃんあつかいするのはやめなさいいけない。むしろ嬉しいだろうが」

「でも、自立って言っても、ぼくは何にもできないよ。ひとりで車いすに登ることもできなかったんだから。いつだって、だれかに助けてもらわないといけないんだ」

「それを言うなら、だれだってみんなそうだよ」

「ぼくは、そういうのとはちがうんだ。何ひとつ、ひとりでできないんだから」

「そんなことないじゃないか。少し前まで、おまえはひとりで体を起こせなかったし、服も着がえられなかった。食堂でトレイを運ぶこともできなかった。いつかひとりできるようになる日が来ることさえ、考えていなかっただろう？　初めてひとりでベッドから車いすに移れたとき、すごく自分が誇らしかったんじゃないか？　自分自身に勝つことは、どんな勝利よりも価値があるんだ。それに、卓球もあるじゃないか。おまえは卓球も強い。そういうば、パトリスが……」

「パトリスに会ったの？　パトリスは会いにきてくれななんだ……」

「来るときに、廊下ですれちがったよ。おまえのことを心配してた。パトリスはおまえが来るのを待ってるそうさ。でも、強制はしたくないらしい。おまえに会えなくてさみしいと言っていたよ」

「どうだか」

ぼくは気のない返事をした。父さんの言葉に納得したように見られなくなかったからだ。でも実際は、だいぶ気分が晴れていた。父さんの言うとおりだ。前ならとてもできないと思っていたようなことが、ここ二カ月でたくさんできるようになった。これからだって、もつといろんなことができるようになるかもしれない。

「ちよつと散歩しないか？」父さんが言った。

「父さんが行きたいなら、いいよ」

施設に来てから、父さんとふたりだけで散歩するのは初めてだった。訪問日じゃないのに散歩をするのも初めてだ。父さんは「手伝おうか」とは言わずに、ぼくがしたくを終えるのをじっと待ってくれた。卓球の雑誌を見るふりをしていても、目のはしで見守ってくれているのがよくわかる。健常者の息子が外出するときスニーカーをはくみたいに、父さんは、ぼくがごくふつうのしたくをしているように接してくれていた。

しばらく寝てばかりだったので、したくはなかなかうまくいかなかった。あの事件の前より時間がかかる。それでも、父さんはじっと待ってくれた。うれしかった。こういうのにつてきつと、うまく言葉が出てこない人と話すときに、相手が言おうとしている言葉が先にわかって、本人が話し終わるまで待つてあげるみたいなものなんだろう。

【中略】 この後、体育館でぼくは父さんと久しぶりに卓球をした。

体育館を出たあとは、父さんと海のほうに行ってみた。このあいだの手すりのそばを通りかかる。ぼくは車いすを止めた。あの日の気持ちがよくえづてくる。あのととき、パニックになったあとは、もう何もかもをあきらめていた。何が起ころうと、どうでもよくなっていた。生まれて初めて、「もう戦わなくていいんじゃないか」という心のささやきに、負けたのだ。戦わないのはとっても楽だった……。そのとき、父さんがぼくの肩に手を置いた。

「おまえが息子でよかった」

なぜだかわからないけれど、ぼくは恥ずかしくなった。それで、聞こえないふりをした。

「そろそろ行くか。もうすぐ夕食の時間だな。父さんも帰らないと、母さんにしかられそうさ」

「わかったよ。また来てくれる？」

本当は「父さんひとりで、また来てくれる？」と言いたかったのに、「父さんひとりで」のところは口に出せなかった。そのせいで、当たり前のことをばかみたいに聞いてしまった。もちろん、母さんに来てほしくないわけじゃない。けど、今日みたいに父さんとふたりだけで男同士の話ができるのはとってもうれしい。

「もちろん来るさ。この近くに仕事関係の現場があるから、前より来やすいと思う。ときどきぬけてこられるだろう。じゃあ、次の試合は必ず見にくるからな」

「やった！ それじゃ、またね」

父さんはぼくにキスをして、車へと向かった。ぼくは、ひとりきりで施設にもどった。でも、不思議と気分は暗くなかった。父さんのおかげで、元気が出たからだ。夕食のとき、ぼくは久しぶりに友だちとふざけて笑った。

(クロディヌ・ル・グイックル・プリエト著 坂田雪子訳『テオの「ありがとう」ノート』)

問一 ―線部①「話をした夫婦は、笑顔も声もやさしすぎなかった」とは、どのようなことですか。いつもはどうであるのかということもふくめて説明しなさい。

問二 ―線部②「たしかに、ぼくは小さな勝利は収めた。でも、大きな戦いには負けたんだ」とは、どのようなことですか。この時の「ぼく」の気持ちもふくめて、百字以内で説明しなさい。

問三 ―線部③「元気になったらまた面談すると約束して、カウンセラーはようやく出ていった」とありますが、「ぼく」は「カウンセラー」に対してどのように思っていますか。そのように思う理由もふくめて説明しなさい。

問四 ―線部④「話を聞きながら、ぼくはしかたなくいっしょに笑った」とありますが、なぜですか。説明しなさい。

問五 「ぼく」にとつての「父さん」は、「母さん」と比べてどのような存在といえますか。そのようにいえる理由もふくめて説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

さて、長々とのべてきましたが、要するに「絵」というものは、私たちが日ごろ忘れている想像や空想の世界、画家が描いた虚実の世界に自然にいざなってくれる、いわば「マジック・ミラー」のようなものだと考えてほしいのです。

「マジック・ミラー」――すなわち、暗い方向から見ると明るい方向の景色が透視でき、明るい方向からは透視できずにただの鏡になるというあの特殊なガラスのことです。ただ、この「絵」というマジック・ミラーのちよつと違うところは、明るい方向からも暗い方向からお互いの姿を透視できるという、いわば両面「マジック・ミラー」とでもいうべき性格をそなえている点です。そう、私たち鑑賞者は「絵」をはさんで画家の心の内側をのぞくことができ、画家もまた自分の描いた「絵」を通して、私たち鑑賞者の心の動きをみることもできます。まるでドラえもんに登場する「どこでもドア」のような鏡じゃありませんか。

そして、絵の「マジック・ミラー」のおもしろいところは、鑑賞者の心理状態や身体のコンディションによって、ガラスの向こうにいる画家の姿がそのたびに微妙に変化してみえることです。私たちは同じ「絵」をみても、その日その時、その場所によって、そこに描かれている風景、花、人、静物……をまったく違った「印象」をもつてみることができるのです。

たとえば、家庭や会社でなにかいいことがあって、上機嫌でみる花の絵は、あなたに生き生きと明るい色や光を放って迫ってきます。そんなときにみる一輪のバラやチューリップの絵は、あなたの明日にかぎりない勇氣と元氣をあたえます。

しかし反対に、恋人にふられたり友人に裏切られたりしてしよげかえっているときにみる絵は、それがどんなに美しく描かれた花や人物であっても、あなたには悲しみに沈んだ絵にみえてしまうのです。まるで画面のなかのバラや美女が、愚かな自分をあざわらい、その失敗を軽蔑しているような感じにみえて、ますます鑑賞者であるあなたを落ちこませてしまうのです。

もちろん逆の逆もあって、落ちこんだあなたを救ってくれる絵もあります。ときとして、しょんぼりしているあなたを、元氣を出しなさい、くじけてはいけませんと励ましてくれる絵もあるのです。絶望の底にあって自殺まで考えた人が、一人の画家の作品に心うたれ、それをきっかけに立ち直ったという有名な話もありますし、人生の壁にぶつかったときに、生きる力をもらいに大好きな一点の絵をたずねて遠方の美術館に出かけてゆくという人もいます。まさしく「絵」というものは、鑑賞者それぞれの精神的な状況によって、さまざまな力を發揮してくれるものだということが、こうした例からもわかってもらえるでしょう。

ですから、ここで忘れてならないのは一点の絵と、何度も何度も向かいあうことの大切さです。
よく世間には、

「私はルーヴル美術館にも行ったし、オルセー美術館にも行った」
とか、

「ピカソのゲルニカもみたし、モネの睡蓮もみた」

とか自慢している人がいますが、世界的な名作ばかりみることが美術鑑賞ではありませんし、外国の有名美術館ばかりをたずねればいいというものでもありません。また、お遍路さんの四国八十八か所の霊場めぐりのように、一点の絵を一度だけ見て歩くというだけでは、ほんとうの「絵」をみる歓びは得られないでしょう。

大好きな恋人とは何回デートしても飽きないように、好きになった絵には何度も会いに行ってほしいのです。そのためには、遠い外国の美術館で名作をみつけるよりも、むしろ自分の住んでいる土地のごく身近な美術館でお気に入りの絵をみつけるのが、上手な「絵の恋人さがし」の極意といえるかもしれません。

とにかく、まちがっても、

「あの美術館には一度行ったからもういい」
だとか、

「あの絵は一度みたからいい」

だとか思っては、^①美術鑑賞の落第生なのです。

新幹線の車窓に富士山が現われたとき、「富士山は昔一度みたからみなくてもいい」と思う人はいないでしょうし、思い出のある音楽を町のどこかでふと耳にしたとき、「あれは昔一度聴いたことのある音楽だから」といつて聴こうとしない人なんていないはずなんですから。

そして、もし^②「絵」というものが人間の生活のなにかの役に立つとしたら、その、何度も好きなものと出会う、自分が美しいと感じたものと出会うというトレーニングにあるのではないか、と考えるのです。つまり、作品を通じて仲よくなった見も知らない画家とことばを交わし、心と心を通わすというトレーニングです。ある意味でそれは、「絵」という無機質な介在物^{かいざいぶつ}を通じて画家と鑑賞者が語りあう、一種の恋の疑似体験^{ぎじたいけん}といえるトレーニングかもしれません。とくに現代のように、人と人との絆^{きずな}

が稀薄^{きはく}になり、人がそれぞれ個の殻^{から}に閉じこもってしまいがちな時代には、ますますこの「絵」をみる、というトレーニングが大切になってきているような気がするのですが、どうでしょうか。

ついでにいうなら、「絵」をみるということは、冒頭^{ぼうとう}でのべた「想像力」「創造力」「空想力」「喚起^{かんき}力」といった感性、人間の生活を豊かにするための、もつとも必要な能力を発達させるトレーニングでもあります。

だれでもうなずかれるとおり、人間や物の価値や美しさは表面的にみえる「外見」だけで判断されるものではありません。いくら「外見」が美しくても、かんじんの「中味」が貧しいものはたくさんあります。また、たとえ「外見」が今ひとつ魅力^{みりよく}に欠けていても、「中味」がすばらしいという場合だってあります。「絵」を鑑賞し味わうというトレーニングは、そうした人間や物のもつ真の価値を見極める、あなた自身の美の物差しを鍛えるトレーニングであるともいえるのです。

(窪島誠一郎『絵をみるヒント』)

問一——線部①「美術鑑賞の落第生」とありますが、なぜ「落第」していると言っているのですか。「絵」と「画家」と「鑑賞者」の関係をふくめて、説明しなさい。

問二——線部②『絵』というものが人間の生活のなにかの役に立つ」とありますが、なぜ役に立つと言えるのですか。百字以内で説明しなさい。

三

各文の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) コウソウビルが立ちならぶ。
- (2) 古寺をハイカンする。
- (3) 大臣をゴエイする。
- (4) テキセツに対応する。
- (5) ギョクセキコンコウの作品展。

第一回入学試験 解答用紙【国語】

受 験 番 号
氏 名
得 点

問 一 ☐

--	--	--

問二

[illegible]

問三

--	--	--

問四

--	--	--

問五

--	--	--	--

二
問

--	--	--	--

問二

[illegible]

(1)	
(2)	
(3)	
(4)	
(5)	

このらんには
何も書かないこと